NPO法人 長崎史談会

長崎学レポート

第19号
2025年9月1日発行
長崎学レポート
編集委員会
〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5一ノ瀬中央橋ビル

2025年度　第1回公開講座 2025年4月19日 ・ 第2回公開講座 2025年6月21日

第一回長崎学公開講座 第一部発表要旨

町年寄高木彦右衛門家の興亡

原田　博二

一、始祖右衛門太夫康宗（？～？）

高木彦右衛門家の始祖については、金井俊行の『長崎名家略譜』（以下『略譜』と記述）には、その記述はないが、『高木家略系愚考＊』（以下『愚考』と記述）には康宗とある。

二、初代彦右衛門宗重（？～一六三五）

初代についても『略譜』にはその記述はないが、『愚考』には宗重とある。宗重は、康宗の子で、彦右衛門と称した。さらに『愚考』には天正一五年（一五八七）長崎に移住、町年寄町田宗賀の没落後、その跡役に任じられたが、後に剃髪、道感と称したとある。

宗重の町年寄就任は、『愚考』によれば寛永二年（一六二五）の町年寄の名前に町田惣右衛門とあるが、同八年（一六三一）には高木彦右衛門とあるので、宗重は寛永二年から同八年の間に町年寄に任じられたものと思われる。

写真1
初代彦右衛門宗重供養塔

なお『略譜』は「道感」を重成の法名とするが、本蓮寺（筑後町）境内の宗重の供養塔（写真1）には「覚性院道感（台霊）」「寛永第十二乙亥天」「二月二十三日卒」と刻されているので、道感は宗重の法名である。

三、二代彦右衛門重成（一六〇八～六三）

二代についても『略譜』には重成の名前はあるものの二代という記述はなく、さらには本蓮寺の高木家墓地に重成の墓碑がないことから重成と重貞が同一人物ではないかとまで推測している。

しかし、『愚考』には、二代は重成とある。重成は、初代宗重の子で、退役後は権左衛門と称した。『愚考』によると、重成には住友、重貞、永貞、作十郎、貞康、権左衛門、彦七郎と七人の男子があったが、長男の住友と二男の重貞が早世したので三男の永貞が家督を相続、三代彦右衛門永貞と称した。

四、権兵衛重貞（一六三四～六〇）

『愚考』によると重貞は、二代重成の二男であるが、万治三年（一六六〇）二五歳で没した。

法名は春光院殿浩岸了徳高木重貞府君、妻の法名は緑了院殿浩林妙浄諦全高嶋氏孺人であるが、二人とも法名が院殿号であるので、当主に准ずる扱いである。

五、三代彦右衛門永貞（一六三五～九五）

永貞は、二代重成の三男である。『略譜』によると、永貞は、初め久松新兵衛正喜の養子となり、善兵衛と称したが、万治三年（一六六〇）の兄重貞の没後、実家にもどり家督相続、町年寄に任じられた。

延宝四年（一六七六）高嶋四郎兵衛茂村とともに郷方支配の加役を命じら

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています

浜屋　メモリード　十八親和銀行　長崎バス　文明堂総本店　みろくや　福砂屋　松翁軒　森谷商会　小野原本店

れ、貞享二年（一六八五）には茂村とともに切米四〇俵四人扶持を給されている。

元禄元年（一六八八）隠居、長崎奉行より一丸の名を下賜され、退隠料を給されている。

写真２　高木家墓地
永貞（左）・貞親（右）

六、四代彦右衛門貞親（一六五六～一七〇〇）

貞親は、重貞の子で、叔父永貞の養子となった。以後、『略譜』によれば元禄元年（一六八八）家督相続、町年寄に任じられた。

元禄一〇年（一六九七）町年寄を免じられ、新設された唐蘭商売元締に任じられ、以後、代物替貿易に辣腕を振った。

元禄一三年（一七〇〇）には代物替會所頭取兼船並武具預に任じられ、切米八〇俵を給されるとともに『寛宝日記＊』によれば帯刀を許されるなど、その権勢はまさに飛ぶ鳥をも落とすの感があった。

七、深堀騒動とその顛末

元禄一三年一二月一九日、佐賀藩家老深堀鍋島家の家臣深堀三右衛門と柴原武右衛門が大音寺坂で高木家の仲間弥助と些細なことで喧嘩、喧嘩は騒動に発展、三右衛門と武右衛門は、二〇日の白昼、応援に駆け付けた一九人とともに西浜町の高木屋敷に討ち入り、貞親を斬殺した。

写真３　大音寺坂

貞親には、彦八郎という嫡子がいたが、彦八郎は、鍋島家の家臣たちが討ち入った際、屋敷内にいながら逃げ隠れたということで、同一五年（一七〇二）三月、長崎五里四方追放、江戸、京、大坂御構、さらには家財欠所に処せられたので、さしもの高木家も断絶に追い込まれた。

ところで大田直次郎著『崎陽又綴』によれば、三右衛門らは高木屋敷に切り込み、風呂から上がったばかりの貞親を花畑に追い詰め、斬殺した。

他に若党六人と仲間一人が斬殺されているが、他の家来たちは、乙名小嶋団蔵が大釜のなかに隠れたように、逃げ廻っていたようである。

結局、逃げ廻っていた団蔵等家来六人と仲間二人も切腹、深堀屋敷で狼藉に及んだ又助ら仲間七人は牢内において死罪（刎首）に処せられた。

深堀方は、三右衛門と武右衛門は切腹、残り一九人の内、一〇人は浦五島町の深堀屋敷において死罪（打首）に、残りの九人は、五島に流罪に処せられた。

参考文献
「長崎名家略譜」『長崎叢書（増補長崎略史　上巻）三』長崎市　大正一五年　六〇三頁～六〇五頁
大田直次郎著「瓊浦又綴」『大田南畝全集第八巻』岩波書店　一九八六年　六五四頁～六五六頁
＊印　長崎歴史文化博物館収蔵本

第二回長崎学公開講座
第一部発表要旨
吉田初三郎が描いた長崎とその周辺

橋本　正信

一、吉田初三郎について

吉田初三郎【明治一七年（一八八四）～昭和三〇年（一九五五）】は、戦前を中心に日本各地の鳥瞰図を制作、生涯を通じて手がけた鳥瞰図は二〇〇〇を超えるとも言われる。初三郎式鳥瞰図とも称されるその特徴を以下にあげる。

（一）大胆なデフォルメを用いた画面構成。
（二）見るものを飽きさせないサービス精神。
（三）多色刷り技術を駆使した美しい色彩。
（四）依頼主重視の商業画家としての側面。
（五）多作を支えた工房での制作体制。

初三郎の鳥瞰図制作におけるピークは大正末から昭和初期とされ、その後戦争色が強くなると鳥瞰図を描くことは困難となった。終戦後、活動は再開するものの全盛期の勢いは失われていた。その再評価の機運が高まるのは、没後四〇年を過ぎた平成以降のことである。

二、初三郎と長崎

大正一〇年（一九二一）、『温泉（うんぜん）』（大正名所圖繪社発行）『小濱温泉名所圖繪』（大正名所圖繪社発行）そして『鉄道旅行案内』（鉄道省発行）の三作品において初三郎は初めて長崎県を描いた。特に『鉄道旅行案内』は鉄道開通五〇周年を記念し版型と内容を一新するにあたり、初三郎に装丁と挿絵が全面的に任された。当時としては画期的なビジュアル重視のこの案内本は発売直後から版を重ね、国内では鉄道観光ブームが訪れた。同時に初三郎の名が全国的に知られることとなり、彼の元には日本中から注文が殺到した。初三郎が長崎を描いたのは彼が最も勢いのあったこの頃である。

特筆すべきは、『鉄道旅行案内』を含め島原半島を描いたほとんどの鳥瞰図は小浜温泉街を中央に置き、背後に雲仙岳を描いた構図で統一されていることである。これは共通の構図を使うことで制

作に要する手間を抑えられるというメリットがあったと考えられる。

『鉄道旅行案内』（大正10年）より　　筆者所蔵

また、この構図は初三郎と交流があった三宅商店により、「湯せんぺい」のパッケージに採用され、現在に至っている。

三、『景勝の長崎』

この作品は昭和九年（一九三四）に長崎と雲仙で開催された国際産業観光博覧会のために制作を依頼され、同年一月に発行された。それはあたかも当時の長崎を一枚の絵図に封じ込めたタイムカプセルを思わせるが、これこそこの作品の現代における存在意義である。

西からの高い視点で描かれたこの鳥瞰図は、航空写真など無かった時代に描かれたとは信じ難いほど細部まで描き込まれ、見るものをその世界に引き込む。それまでの鳥瞰図制作で培った技術全てをつぎ込んだ『景勝の長崎』は紛れもなく初三郎の代表作の一つである。

最近明らかになったのは『景勝の長崎（長崎市鳥瞰図）』には印刷版のほかに、絹本彩色版（肉筆画）が二点存在しているという事実である。初三郎の場合、印刷版の他に肉筆版が納品されることは珍しいことではないが、肉筆版が二点描かれ、それぞれの内容が異なるのは非常に興味深い。

現在、肉筆画一点は長崎歴史文化博物館に収められており、もう一点は福岡県在住の吉田初三郎研究者が所有している。

そこでこの二点を比較し精査していくと、図らずも『景勝の長崎』に至る制作過程の一部が明らかになってきた。結論を言えば、昭和六年（一九三一）年の現地取材後に最初に描かれたのが博物館所有の肉筆図である。その後、修正を加えたもう一点の肉筆画が描かれたのだが、何らかの理由で印刷版の原画としては不採用となった。そこで最初に描かれた肉筆図を元に印刷版が制作されていったと考えられる。

『景勝の長崎』は取材から発行まで足掛け四年と初三郎の作品としては異例の長い制作期間を費やしているが、このような経緯が背景にあったと推察される。

今回二点の肉筆画の調査により初三郎の制作過程の一部が垣間見えたことは僥倖だった。

長崎市鳥瞰図（絹本着色）　　長崎歴史文化博物館収蔵

参考文献
「古地図研究三〇七号　吉田初三郎特集」日本古地図学会　二〇〇〇年

第一回長崎学公開講座 第二部発表要旨

ラジオ長崎が開局した頃

堀田　武弘

「ラジオ長崎」（現在のNBC長崎放送）の開局は、長崎魚市㈱と長崎商工会議所との関係がたいへんに深い。

大正初め頃から日本の漁業が変化し始めた。トロール漁船が登場し、漁場が近海から東シナ海へと変わっていった。この時長崎に進出してきたのが林兼商店（後の大洋漁業）で、この会社の支店長として赴任して来たのが中部悦良（えつろう）だった。着任早々「長崎人になります」と決意を述べ、地元経済界で次第に頭角を現し、長崎商工会議所会頭となった。

中部悦良

戦後、民主主義の世の中となった日本では、アメリカをモデルに放送も

民間に開放された。中部悦良はGHQにより公職追放にあったが、現役に復帰すると民放開設の中心となり「長崎平和放送」として申請、全国一九番目の民放「ラジオ長崎」として、昭和二八年（一九五三）三月一日に電波を発射、初代社長となった。

「長崎商工会議所」
（大正末の長崎商業会議所時代）
（著者蔵）

ラジオ長崎の放送は、市民から〝赤レンガ〟と親しまれた桜町の長崎商工会議所内にスタジオを設けて始まった。開局当時の番組で現在もかたちを変え継続しているのは、「長崎こぼれ話」としてスタートした永島正一先生の「長崎ものしり手帳」と「お誕生日おめでとう」がある。

テレビ放送が始まったのが昭和三四年（一九五九）一月一日。開局早々の人気番組は「月光仮面」だった。

昭和三七年（一九六二）社屋が上町に竣工した。この後、長崎商工会議所の建物は国道拡幅工事により解体された。

NHK長崎放送局が現在の場所に開局したのは昭和八年（一九三三）、日本が国際連盟を脱退した年である。初代放送局長は松尾重太郎であった。NHKの社史には松尾の写真がない。

昭和一一年（一九三六）長崎出身の小説家平山盧江が里帰りするが、地元文化人と写った記念写真のなかにその姿を発見した。（林源吉旧蔵）

右が松尾重太郎
左は林源吉

松尾重太郎は長崎市伊良林町に住み、長崎高商で学び逓信省に入った。その関わりで初代長崎放送局長になったという。住まいは光源寺の右隣だった。（光源寺、越中静子さん談）

第二回長崎学公開講座 第二部発表要旨

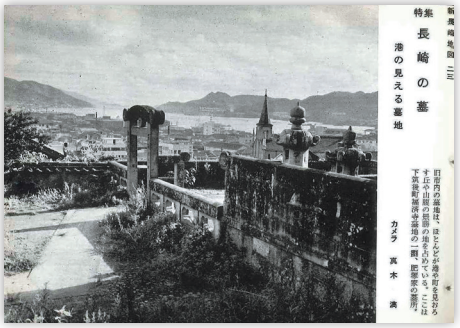
『長崎手帖』にみる明治から昭和三〇年代の長崎

下妻みどり

『長崎手帖』（以下『手帖』）は昭和三一年（一九五六）から昭和四二年（一九六七）にかけ、全四〇号が発行された小冊子である。「長崎のさまざまな味と色と匂を、こぼれるようにもりたい」と、B六判一六ページから始まった。

『長崎手帖』（筆者蔵）

「長崎っ子診断（八号）」「長崎の横丁（一八号）」「居留地の今昔（二一号）」「くんち（二五号）」などの特集や、硬軟とりまぜた記事が並ぶ。発行人である文筆家の田栗奎作や郷土史家らによる記事に加え、商店主など市井の人々の寄稿も多い。版画家田川憲の作品が表紙を飾り、写真家真木満がグラフページを担当するなど、小さいながらも読みごたえのある「タウン誌」として親しまれた。



28号「墓特集」　グラフページ

明治生まれの人々の談話等も積極的に掲載。「大浦よもやま話」（二二号）と称した「元グラバー主治医」らによる誌上座談会のほか、読者の投稿や聞き書きの連載「茶のみ話」には、カステラの値段から、ロシアの軍艦に出入りしていた商人がチョンマゲを切られた話など、明治から昭和初期にかけての長崎らしいエピソードが収められている。

一方、当時の長崎は、高度経済成長期の中で急速に変化していた。『手帖』発行の間にも、浦上天主堂の遺構の撤去や洋館の解体、町界町名の変更などが相次いだ。昔を知る古老たちも次々に旅立つ中、「とにかくもう少し長崎の色々のことを載せてしまうまでは」（二一号）と、町と時代の「味と色と匂」を探し続けた。

昭和四二年発行の四〇号は「丸山」特集の記念号で、次は「五〇号を目標に」と意気込むも、結果的にはこれにて終刊となる。

田栗はその後、『長崎印刷百年史』『長崎浜の町繁昌記』『長崎原爆戦災誌』など大部の年代記を手がけた。それらには、『手帖』の記事の流用や取材の成果と思われる部分がしばしば見受けられる。小さな『手帖』の歩みは、長崎の歴史にたしかな足跡を残したのである。

田栗奎作（筆者画）